

木馬は廻る 江戸川乱歩

「これ、駄目でしょ」彼女はある時、彼女の肩にかかっている流行おくれのシヨールを、指の先でもてあそびながら云ったものである。だから、無論それはもう寒くなり始めた頃なのだが「おとしのものですもの、みつともないわね。あたしあんなのを買うんだわ。ね、あれいでしょ。あれが今年のはやりなのよ」彼女はそう云って、ある洋品店の、シヨールウインドウの中の立派なのではなくて、軒の下に下っている、値の安い方を指さしながら、「ああ、早く月給日が来ないかな」とため息をついたものである。

成る程、これが今年の流行だな。格二郎は始めてそれに気がついて、お冬の身にしては、さぞ欲しいことであろう。若し安いものなら財布をはたいて買ってやってもいい、そうすれば彼女はまあどんな顔をして喜ぶだろう。と軒下へ近づいて、正札を見たのだが、金七円何

十銭というのに、迎も彼の手に合わないことを悟ると、同時に、彼自身の十二歳の娘のことなども思い出されて、今更ながら、この世が淋しくなるのであった。

その頃から、彼女は、シヨールのことを口にせぬ日がない程に、それを彼女自身のものにするのを、つまり月給を貰う日を待ち兼ねていたものだ。ところが、それにも拘らず、さて月給日が来て二十幾円かの袋を手にして、帰り途で買うのかと思っていると、そうではなくて、彼女の収入は、一度全部母親に手渡さなければならぬらしく、そのまま例の四辻で、彼と別れたのだが、それから、今日は新しいシヨールをして来るか、明日は、かけて来るかと、格二郎にしても、我事の様になっていたのだけれど、一向その様子がなく、やがて半月程にもなるのに、妙なことには、彼女はその後少しもシヨールのことを口にしなくなり、あきらめ果てたかの様に、例の流行おくれの品を肩にかけて、でも、しよっちゅう、つつましやかな笑顔を忘れないで、木馬館への通勤を怠らぬのであった。

その可憐な様子を見ると、格二郎は、彼自身の貧乏については、嘗つて抱いたこともない、ある憤りの如きものを感じぬ訳には行かなかった。僅か七円何十銭のおあしが、そうかと云つて、彼にもままにならぬことを思うと、一層むしゃくしゃしないではいらなかった。

「やけに、鳴らすね」

彼の隣に席をしめた、若い太鼓叩きが、ニヤニヤしながら彼の顔を見た程も、彼は、滅茶苦茶にラツパを吹いて見た。「どうにでもなれ」というやけくそな気持ちだった。いつもは、クラリネットに合わせて、それが節を変えるまでは、同じ唱歌を吹いているのだが、その規則を破つて、彼のラツパの方からドシドシ節を変えて行った。

「金比羅舟々、……おいてに帆かけて、しゅらしゅしゅら」

と彼は首をふりふり、吹き立てた。

「奴さん、どうかしてるぜ」

外の三人の楽隊達が、思わず目を見合せて、この老ラツパ手の、狂燥を、いぶかしがった程である。

それは、ただ一枚のシヨールの問題には止とどまらなかった。日頃のあらゆる憤懣が、ヒステリイの女房のこと、やくざな子供達のこと、貧乏のこと、老後の不安のこと、も早や歸らぬ青春のこと、それらが、金比羅舟々の節廻しを以て、やけにラツパを鳴らすのであった。